

インターネット公開許諾のない文章に墨消し処理を施しています。

## 思ひ出

豊岡博道

▼ 勤息勸學 の逸話二三を録して追悼の微意を表せむと欲す。

▼ 勸學 一心寺に在住の砌、研鑽講學に日も亦足らず、時偶々大内青巒四條南座に佛

教大演說會を開く、其雄辨宏辭都鄙に藉々たるの際なるを以て前景氣甚だ盛なり。適々某師(現に鎮西の名刹を董す)勸學を訪問の閑談中告ぐるに此事を以てし、共に往いて聽かむとを從憑せられしに、勸學に承諾の色ありしを以て期に至り勸學の門を敲き伴ひ行かむとす。勸學突如某師に問ふて曰く大内青巒は知名の士なりとさあれ之を天台大師と比較せんには如何と、此の奇問に接する某師は呆然たること寸時、而も答へざる能はず、即ち曰く彼を以て此に比する倫を失する敢て言を待たずと。此の答を聞きたる勸學は、君も爾カ云ふ我も亦爾が思ふなり、大内の説を聞く時間を以て天台の書に親しまむに如かすと云ひ終つて、書に向ひ又傍ら人なきが如し。

▼勸學　の東都傳通院を董し宗學本校に教鞭を執りて二三年を過ぎたる頃、當時の哲學館主井上圓了氏來りて其佛敎講義錄に執筆せむことを囑す。勸學即ち問ふに哲學の何なるやを以てす、井上氏は茲に於て哲學が一切の學問の基礎にして學問中の學問なることを論ずること時餘、間を待ちたる勸學は、して見ますると哲學をやれば天地間の事は皆分りますのですナア、井上氏曰くハイ左様です。勸學曰くソソナラお尋ねしますが、アノ櫻の木(折柄冬の最中にて枯木の如くなれる櫻の木を指し)には其中に花が咲きますが、今では何も認められませぬ。アナタノ學問でソノ花のアリカ

が分明りますか、井上氏茫然たること良久し。

▼勸學の學性相に精しく其論疏は殆んど之を暗んじ、其の論題に就ての卷數丁數を指摘すること掌を指すが如し、此の篤學はやがて世間の事に親しましむる余裕を與へざりしものゝ如く、新聞紙の如きは曾て之を手にはせざりしものゝ如し。或時伴僧に語つて曰く、此頃顯微鏡なるものあり如何なる遠方の物も目前に在るが如く見する器械なりとの事なりと。蓋し文字に依りて顯微なるが故に遠方の微をも見せしむるものなりと解せられしものならむ。

▼勸學 金鑰論を著はせる頃は年壯氣銳新傳語に關して立破の銳鋒當るべからず、説いて此に至るや門主行誠和上を指して隣寺の和尚がと云ふ、蓋し一心寺の一本山なるにも依るならむか。

▲明治四十二年の交第二回教學高等講習會を増上寺に開くや、學徒奮起の機會を作らむ爲め、當時布教部長の任にありし余は椎尾宗學部長と謀つて、一宗傳法に就て長老の意見を聽くを名とし、勸學の出席を請ひ、當日先づ神谷大周僧正の新傳語流の講演を以て幕を開く、勸學沸然として曰く、私は喧嘩しに來たのでは御座りませぬと、余百萬陳辯事なきを得、勸學の講演あり、最後に判者ならぬ判者の黒田勸學の講演あり。

りて無事終局を告げしことあり。是れ余の勸學の獅子吼を受けし最後のものなりしと同時に、教壇上に於ける此の壯觀は恐らくは再び看難き者ならむ歟。

## 追懷と希念

末學 大村 桂 巖

故勸學勤息義城僧正の追弔號に何か書けとの事でしたが、此頃は非常に忙殺されて居りますので心ならずも何も纏める事が出来ませぬ、私は不幸にして勤息勸學からは授業は受けませんでしたから直接勸學からの影響や感化を受くる機會を持ちませんでした、併し私に學當時の高等學院は傳通院の傍にありましたので、時々勤學の風貌に接する事を得ました、尤も高等學院の教授を勤めて居られたので、學校内でも色々の噂も承りました、教員室で勤息勸學丈けはいつも昆布湯を召上がるのだとか、顯微鏡の事を望遠鏡と間違て居られて「望遠鏡で蟲を見れば……」と仰つしやつたとか言ふ事です、私は此事が非常に深く今でも印象して居て而して其が勸學に相應し